

でありながら、田に水をひくには不便な土地でした。

田に水をひくためには、水をためるための堰や、長い水路をつくらなければなりません。一つの村だけでは、どうすることもできないこともあったのです。

与次右衛門は、三十二歳になったとき、正式に肝煎になりました。

このころ、会津藩としても、大がかりな堤防工事をはじめることになりました。藩の工事といっても、村の人たちが工事にあたるのです。与次右衛門も、肝煎として、

